

農産部会の調査・研究について

農産部会主任研究員 成田 国寛

Report

毎日が、暑いですね。会員の皆さんはいかがお過ごしでしょうか。7月に入ってから、東京でも猛暑が続いています。梅雨はどこにいったのでしょうか？今年の水は大丈夫？と心配してしまうほどです。

Radixの会農産部会で進めております調査・研究についてご報告します。

1. 圃場試験

消費者に求められている品質の高い（おいしく、ビタミン・ミネラルなど望ましい成分が高く、逆に硝酸態窒素やシユウ酸などは低い）農産物づくりに役立つ栽培技術の評価を行ないます。内容品質を高める方法の一つとして、堆肥や有機資材などの効果的な活用があげられます。一方、堆肥や資材の使い方を誤ると品質劣化や病害虫被害に結びつきます。そこで、堆肥や資材の使いこなし方を知るための試験・評価を行ない、栄養価・収量アップ、環境負荷の低減化に結びつけていきます。

今年度は、栃木太陽の会の信末氏のご好意により、約10aの圃場を借り受け試験を行ないます。土壌中の肥料成分の変化や野菜の収量、品質、内容成分の調査を行い、生育・品質が良く環境負荷の少ない堆肥施用量はどれくらいがよいのかを調べる予定です。

すでに、環境保全型農業に関する栽培技術の情報を集めつつ、圃場の事前評価として土壌分析等を実施し、本試験前の準備を進めています。

9月より秋作のホウレンソウ、コマツナなどの葉物野菜を中心に、堆肥の施用量と生育の関係などを調べていく予定です。現在、農産部会内にて詳細な試験計画の調整を行なっている段階ですので、決まり次第ご報告したいと思います。

2. 資材調査

農産部会では、以前より有機資材についての情報を集めてきました。農薬同様、使用している資材に関して、消

費者に説明できるものでありたいと考えているからです。また、効果的な使い方や施肥設計にもつながります。

今年度は、特に有機認証可能な普通肥料や特殊肥料、土壌改良材などを中心に情報を集めています。「この資材は有機認証がとれました！」という情報をお持ちの方、ぜひとも事務局までご一報ください。多くの生産者の方が、このような情報を知りたがっています。

また、資材の内容が不明なもの、ちょっと調べたい事でも、お気軽に事務局までお問い合わせください。

成田国寛

●プロフィール
1966年生まれ。カゴメ総合研究所、らでいっしゅぼーや(開発部門およびIII基準委員会事務局担当)、ジャパンバイオファーム勤務を経て3月より、Radixの会農産部会主任研究員



2001年小祝塾・第4回開催のお知らせ

今年1月から開催している小祝塾の第4回が、9月14、15日の2日間、群馬県北軽井沢町で開催されます。

■未熟の有機物を残さない

これまでの第1回から第3回では、延べ260人の生産者が参加して、堆肥作りについての基本を学びました。土壌中に未熟の有機物が残ることによる弊害として、様々な病害の発生が挙げられ、堆肥作りの際にこのような未熟物をしっかり分解させるための資材の選定、資材に含まれるC(炭素)とN(窒素)の比率、C/N比の活用を基本に勉強が進められました。

その実践例として、第一回の東日本編では、Radixの会会長でもある、栃木太陽の会・信末清さんの堆肥場を見学、ど

のような堆肥が完熟と言えるのか、腐熟の見極めなどを学びました。

同じく第二回の西日本編では、講師である小祝政明さんの指導による堆肥作りの成功例として、愛知県・裏谷高原牧場を見学、畑作にそのまま使える畜産堆肥の実例を学びました。

いずれも、作物を健康に育てるゆりかごととして継続的に維持管理されるために必要な「堆肥」がテーマ。基本中の基本として、未熟の有機物を土に残さないための技術の勉強会、良い堆肥の作り方の勉強会となりました。

■適正施肥の重要性

さて、皆さんご存知のとおり、よい堆肥が作れてもそれが良い作物となる訳ではありません。堆肥以外の肥料要素全般、

すなわち施肥全体を適正にコントロールすること、施肥設計が大切になってきます。

生育ステージ全体の肥料成分が少なければ収量や品質に影響がありますし、多肥により収量が確保されても昨今課題となっている作物中の栄養成分(特に硝酸態窒素)に偏りが発生したり、地下水汚染の危険を孕んだり、やはり問題が生じます。

第4回の小祝塾では、今年の作物の生産状況を踏まえて、こうした点にメスを入れてゆけたらと考えています。

すでに来年の作のための土作りは始まっています。今年より来年、来年よりさ来年と、参加者皆さんの技術が高まるよう、真剣に、そして楽しく取り組んでいきたいと思っておりますので、ぜひ多くの皆様のご参加をお待ちする次第です。よろしくお祈りします。(事務局・竹内)